

明治前期「奈良倶楽部」の成立と建築位相

— フェノロサ設計の可能性をさぐって —

川 島 智 生

Appreciation of the Architecture of “NARA KURABU (Club)” of the Early Meiji:

A Supposition of the Designer of Ernest Francisco Fenollosa

KAWASHIMA Tomoo

要 旨

奈良倶楽部とは奈良公園の一角に明治22（1889）年から昭和60（1985）年までの約1世紀、存在した建物である。この建物は明治前期の和風スタイルを採る建築では珍しく十字の平面を有し、その中央交差部には楼閣風の塔が付く。その破風には海鼠壁が張り巡らされ、頂部棟端には奈良時代復古風の鴟尾が載り、四面ともに入母屋造となる外観を示す。このように、一般的な和風建築ではまずありえない不思議な形が表現されていた。内部は塔の下、1階から3階まで吹き抜けの一続きの空間となる。ここには明らかに西洋建築に影響を受けた空間が現出していた。従来の伝統的な和風建築では用いられなかった擬洋風や擬和風の手法が用いられており、明治以降の近代建築の特質を示す建築といえる。

奈良倶楽部については施主名以外、設計者はおろか、施工者もわからず、何のためにこのような形になったのかも含めて一切が不詳であった。筆者はこの建物を設計したのが日本美術の恩人とされる御雇い外国人教師アーネスト・フェノロサだったという文献を先年に見いだした。その信憑性については検討の余地があるが、すなわちこの史実の解明は日本の近代建築史だけにとどまらず、文化史全体にまで影響を及ぼす内容であると考え、探求に至った。

奈良倶楽部とは銀行の集会所としてつくられるが、天皇の行在所となるなど、奈良では最も格式の高い建築として位置した。奈良の大工棟梁で後に明治神宮の建設責任者となる木村米次郎が設計に関わっていたことが判明した。フェノロサの設計の可能性はおそらくは外観スタイルや内部空間の提案レベルのものであり、スケッチくらいは描いた可能性もある。

キーワード：倶楽部建築、擬和風、フェノロサ、近代奈良、木村米次郎

Abstract

- 1, Originally built for an assembly hall of a bank, the Nara Kurabu has been regarded as the most formal architecture in Nara, having been used as the Emperor's temporary quarters. KIMURA Yonejiro was engaged in the design, who afterwards worked as master builder for the Meiji Shrine.
- 2, Depending on the recollections of the architect SO Heizou, my research for this paper is to evaluate the degree of influence of the designer of Fenollosa. However, the facts indicate that Fenollosa may have merely suggested the design of the internal space and the external style, only drawing some of the design.
- 3, The Architectural features are: the ornamental ridge-end tile on the roof ("Shibi"), the gable, the "namakokabe" (sea-cucumber-like wall), the "Irimoya" style in all sides, the interior cross type in blow-through space, etc. In general, the style is mixed with pseudo-Japanese and pseudo-European, which is never seen in traditional Japanese architecture. "Nara Kurabu" building represents the characteristics of modern style in the Meiji era.
- 4, While it was least evaluated among architects, OE Hiroshi appreciated it highly in terms of space design.

Key words: Club Architecture, PseudoJapanese style, Ernest Francisco Fenollosa, Modern Nara, Kimura Yonejiro

序

最初この建物に興味を抱いたのは奇妙な望楼風外観が表出されていたことにある。そしてその誕生が明治22（1889）年というきわめて早い時期だったことによる。すなわち奈良は風致と古都を意識して公共建築の多くが明治20年代後半以降は和風スタイルとなった。その出発点に挙げられるのが、明治28（1895）年に完成する長野宇平治による奈良県庁舎だったが、それより六年も前の明治22（1889）年にこのような建造物が誕生していたとは驚きである。ある意味では意識した「和風」スタイルの先駆けと捉えられよう。大工が見よう見真似で洋風を手がけた擬洋風とは逆に和風的な要素を強調した「擬和風」スタイルといえるのかも知れない。

奈良倶楽部とは奈良公園の一角に明治22（1889）年から昭和60（1985）年までの約1世紀、存在した建物である。この建物は明治前期の和風スタイルを採る建築では珍しく十字の平面を有し、その中央交差部には楼閣風の塔が付く。その破風には海鼠壁が張り巡らされ、頂部棟端には奈良時代復古風の鴟尾が載り、四面ともに入母屋造となる外観を示す。このように、一般的な和風建築ではまずありえない不思議な形が表現されていた。

内部は塔の下、1階から3階まで吹き抜けの一続きの空間となる。日本人大工棟梁だけで発想し、完成させた仕事とはとても思えない。ここには明らかに西洋建築に影響を受けた空間が現出していた。施主名以外、設計者はおろか、施工者もわからず、何のためにこのような形になったのかも含めて一切が不詳であった。

失われて二十八年が経過する建造物を、なぜ今取り上げる意味があるのか。筆者はこの建物を設計したのが日本美術の恩人とされる御雇い外国人教師アーネスト・フェノロサだったという文献を先年に見いだした。その信憑性については検討の余地があるが、すなわちこの史実の解明は日本の近代建築史だけにとどまらず、文化史全体にまで影響を及ぼす内容であると考え、探求に至った。

研究の進め方については、まず解体前におこなわれた実測調査に基づく図面類の分析をおこない、実像を把握しその建築特質を抽出する。次に奈良倶楽部ならびにフェノロサに関する文献調査をおこない、建築に関する記述をピックアップし、フェノロサ設計説の信憑性について検討をおこない、フェノロサの関与の可能性を探る。

管見の限りに於いては、本研究で対象とする奈良倶楽部はこれまではほとんど注目されてこなかった。その理由は設計者や建設経緯などの不詳という史料的な制約にくわえて、「近代」という新しい時代の建築であったことが、古い歴史の都・奈良では軽んじられる傾向にあったことが関連する。奈良における近代建築に対する目利きがいなかったことが関係するものと思われる。そのため1980年代以降盛んになった近代和風建築研究のなかでも、ほとんど言及がない。

1 奈良倶楽部の成立

1-1 成立

その建設経緯をみる。明治21（1888）年に奈良県郡山町に本店を有した第六十八国立銀行¹⁾奈良支店と大阪に本店を有した第三十四国立銀行²⁾奈良支店が共同して「集会所」³⁾として建設した建物とされ、当初は奈良倶楽部と命名される。明治21（1888）年7月に建設が始まり、明治22（1889）年に完成している。この地には元々は四恩院の建物があった跡で、廃仏毀釈によって荒地と化していた。建設時この土地は春日神社境内地であった。

消滅していた奈良県が再設置されたばかりの時期に、なぜ奈良倶楽部がつくられたのか。その理由は定かではないが、奈良県再設置の記念事業という側面があった可能性も考えられる。税所知事を迎え、奈良の有力者たちは花火を打ち上げ、喜びに沸き返った。奈良県開庁式が明治20（1877）年12月1日におこなわれ、翌年7月に着工ということからは、半年以内に設計が終えられていたことがわかる。すなわち新奈良県誕生直後に構想が練られていたものと判断で



写真1 奈良倶楽部外観・西南側



写真2 空撮

きる。

その背景⁴⁾には明治9(1876)年に奈良県が廃止され、堺県に編入され、明治14(1881)年には大阪府に合併された。その結果「失うところ多く得るところ少なし」という様態を示し、地元進出の議院を中心に大阪府からの独立が目指される。その運動は五年間に及び、元堺県令の税所篤の斡旋があり、伊藤博文と山県有朋の内諾を得て、奈良県の再設置が決まる。

税所は再建された奈良県初代知事となる。税所は西郷の片腕として活躍、戊辰戦争では大坂にあつて新政府軍の軍事費などの財政処理を務め、明治以降は河内県知事、兵庫県知事、堺県知事を歴任した。税所は古美術蒐集の趣味があり、政府高官の権勢を使い奈良中の古美術を強引な手法⁵⁾で集め、個人コレクションとする。その過程で後の詳述するフェノロサとも繋がりがあつたことが想像される。税所はその後、正倉院御物の整理掛や奈良帝室博物館評議委員をつとめる。このような知事が奈良倶楽部の構想に加わっていた可能性も考えられる。

ふたつの銀行の集会所という名目上、建設資金は両銀行から調達されたと思われる。奈良県設置に伴い、「奈良県の金庫としての役目」を果たすべく大和郡山の第六十八国立銀行は奈良出張所を昇格させて支店としていた。大阪にあつた第三十四国立銀行は、その頭取・岡橋治助と税所が知遇にあつたものと推察される。

1-2 設計者・木村米次郎の述懐

今回文献調査で筆者が見出したものに『明治二十三年大和行啓記』⁶⁾という文献があり、そこには次のような設立経緯が記されていた。

明治二十一年七月税所篤知事時代、天満紡績会社・摂津紡績会社合併シテ其紀念ニ創建、番匠ハ大阪ノ大工棟梁高津米八、自分モ設計ヲ依頼サレ此建築ニ加ハル、建築ノ資金ハ六十八国立銀行三十四国立銀行奈良支店之両行ヨリ立替テ支払ヒタリ、二十一年七月ヨリ工ヲ起シ約一ケ年ヲ経過シ竣工ス

ここにこれまで不明だった建設経緯の概要が示され、設計者ならびに施工者名が明記された。この内容の信憑性はいかなるものなのか。同書には「木村米治郎翁云」⁷⁾とあり、木村が語つた内容が記されたものと思われる。木村米次郎の肩書きについては「明治神宮御造営ニ従事セシ技手」と記されていた。まず建設経緯の「天満紡績会社・摂津紡績会社合併シテ其紀念ニ創建」についてみると、あきらかに両者は合併しておらず、記憶違いか、書き間違えであつたと判断できる。天満紡績は明治33(1900)年に朝日紡績と合併して大阪合同紡績となり、その後さらに合併をおこない東洋紡績となる。一方の摂津紡績は大正7(1918)年に尼崎紡績と合併して大日本紡績となる。

木村は万延元(1860)年に大阪堺の宮大工・木村市左エ門の十代目・木村儀平の長男⁸⁾として、大阪府堺市少林寺町に生まれ、



写真3 木村米次郎の顔写真



写真4 伊勢の神宮農業館

昭和13（1938）年に奈良市水門町の自宅で亡くなっている。この文書が作成されたのは昭和8（1933）年ということから、当時木村は73歳で健在であり、筆者の藤田祥光⁹⁾が直接に聞き取り調査をおこなったものと判断できる。

木村は明治神宮の建設¹⁰⁾で名が知れた建築技術者¹¹⁾だったが、それ以前の明治21（1888）年7月から明治36（1903）年6月までの16年間は奈良県庁に在籍し、主に古社寺建造物主幹修理技手を勤めていた。詳細な経歴については表1に示した。奈良時代は法隆寺や唐招提寺の修復を手がける一方で、奈良県物産陳列館をはじめ県の高等女学校、尋常師範学校、畝傍中学校などの新築現場にも関わっていた。つまり洋風の木造建築の設計をも手がけていた。木村は明治38（1905）年には造神宮に移り、片山東熊設計の伊勢の神宮農業館¹²⁾の実施設計と現場監理を手がけている。中央に方形の望楼を抱く点は奈良倶楽部と共通する。

奈良倶楽部の工事が始まったのが明治21（1888）年7月だが、木村はその年7月2日から奈良県監獄授業手になっている。「授業手」とは建築工事に関する職種と考えられるが、詳細は不明である。木村はこの年2月29日に香川県多度津郵便局を竣工させ、大阪に戻り天満紡績会社の建物の設計にかかっていた。木村米次郎の遺族所蔵の履歴書のなかで、その欄外に「明治二十一年三月ヨリ六月マデ天満紡績会社建築工事ニ付設計ヲナス」と記される。天満紡績とは明治中期に大阪に存在した紡績会社で、第三十四国立銀行頭取の岡橋治助ら大阪の商工業者が中心となって設立された。この時期は天満紡績の第一工場が明治21（1888）年に、第二工場が明治22（1889）年に完成しており、日本屈指の紡績会社となった。この2工場の設計に関わった可能性もあるが、ともに煉瓦造の建物¹³⁾であり、木村は煉瓦造を専門とした建築技術者ではなかったので、煉瓦造紡績工場設計の中心メンバーだったとは考えにくい。

木村が従事した天満紡績に関わる設計が明治21（1888）年6月に終わられており、同年7月より奈良倶楽部が着工されることを考えれば、時期としては合致する。筆者はこの三ヶ月の期間を奈良倶楽部の設計期間であると推測する。

木村の述懐に「番匠ハ大阪ノ大工棟梁高津米八」とある。高津とはいったいどういう人物なのか。史料をさぐったが現時点では判明していない。高津米八が建設全体の責任者であったと読み取れる。なお「番匠」とは近世では大工の俗称であった。木村は「自分モ設計ヲ依頼サレ

表1 木村米次郎の経歴

歳	年	月日	項目
0	万延元年(1860)	3月14日	堺市竹林寺町東一丁五十九番地に木村儀平の長男として生まれる
19	明治12年(1879)		社寺建築学其他 秋瀧友吉氏に就き修業し其れより明治20年迄大工實業ヲ修業
27	明治20年(1887)	10月3日	多度津郵便局舎新築工事中臨時雇を命す(丸亀通信管理局)
	明治21年(1888)	2月29日	多度津郵便局舎新築工事落成に付臨時雇を免す、この直後大阪に戻る
28	明治21年	3月～6月	大阪天満紡績会社建築工事ニ付設計をなす、この頃奈良倶楽部の設計に参画
	明治21年	7月2日	奈良県監獄授業手・奈良県
31	明治24年(1891)	8月28日	古社寺修理技師として法隆寺の橋夫人厨子を修理
33	明治26年(1893)	4月19日	法隆寺修繕工手下監督を嘱託す・工事監督部
	明治26年	11月30日	法隆寺堂宇修繕工事落成に付下監督の嘱託を解く 監獄署第三課勤務を命す・奈良県
36	明治29年(1896)頃		奈良県尋常師範学校ならびに高等女学校新築設計
37	明治30年(1897)	6月7日	奈良町土木事務を嘱託す・奈良町役場
	明治30年頃		奈良県立畝傍中学校ならびに奈良県尋常師範学校寄宿舎新築設計
38	明治31年(1898)	3月23日	古社寺建造物主幹修理技手を命す・唐招提寺出張所勤務を命す・奈良県
	明治31年	5月20日	奈良県社寺土木工事修繕監督を嘱託す 7月嘱託解
39	明治32年(1899)	6月24日	奈良県内務部第一課唐招提寺出張所勤務を命す
	明治33年(1900)	1月13日	嘱託ヲ解ク・奈良市参事會
40	明治33年	2月1日	内務部第一課東大寺出張所勤務を命す・奈良県
	明治34年(1901)	2月	手向山神社拝殿新築工事監督の嘱託を受す 同年9月落成
41	明治34年	9月30日	内務部第一課新薬師寺出張所勤務を命す
	明治34年		生駒郡西ノ京尋常小学校(現、奈良市都跡小学校)新築設計 ならびに奈良刑務所新築設計にも参画
	明治35年(1902)	1月15日	内部部第一課法隆寺出張所兼新薬師寺出張所勤務を命す
42	明治35年		奈良県物産陳列館現場監督
43	明治36年(1903)	6月27日	奈良県内務部依願免職、任造神宮技手・造神宮使廳
44	明治37年(1904)	8月2日	宇治山田の神苑會農業館及事務所建築監督を嘱託す
45	明治38年(1905)	6月16日	神苑會農業館及事務所落成に依り解
46	明治39年(1906)	4月12日	兼任内務技手 神社局勤務を命す・内務省、この頃東京に移住
47	明治40年(1907)	6月18日	歸廳に命す
54	大正3年(1914)	4月30日	免兼官、神社新築工事調査の嘱託す、神社奉祀調査事務補助を嘱託す
55	大正4年(1915)	5月1日	任明治神宮造営局技手 兼任造神宮技手 第二課勤務を命す・明治神宮造営局、造神宮使廳
	大正4年	11月6日	經理課兼務を命す・明治神宮造営局技手主席
61	大正10年(1921)	3月	明治神宮完了に伴い退官、奈良に戻る
62	大正11年(1922)	3月31日	奈良市水門町26番地に自邸完成(現存)
73	昭和8年(1933)	6月	奈良観光産業博覧會の展示館・阿利山館(台湾総督府営林署)を 自宅内に離れとして移築(建物は現存、棟札あり)
	昭和8年		奈良倶楽部について藤田祥光による聞取り
75	昭和10年(1935)		著作『規矩術』完成
78	昭和13年(1938)	1月28日	自宅で死去

備考：出典は木村米次郎自筆経歴書(2種類)にくわえ、御子息・木村良雄による「木村米次郎の略歴」『規矩術』による。



写真5 木村米次郎邸

此建築「加ハル」とあることから、高津米八が主導していた建設事業に設計面で加わったと捉えることもできる。

1-3 その後

奈良倶楽部の後の沿革をみると、奈良倶楽部は奈良公園の整備のなかで、明治33（1900）年に奈良県に土地ともに買収される。奈良県側では奈良倶楽部を迎賓館ないしは集会所として利用を目論んでいた。ただ建物の規模が小さいため、新たに明治36（1903）年に新館が隣接して建設される。以降奈良倶楽部の建物は2号館、新設された建物は1号館と呼ばれる。その後、昭和56（1981）年に閉鎖され、昭和60（1985）年に解体される。

奈良倶楽部は皇族の宿泊に利用されていた。明治23（1890）年4月には皇后陛下之御泊所となる。明治41（1908）年の陸軍大演習時には大本営に充てられ、明治天皇の行在所となる。その時に内部は改修される。東室（54畳）は4室に分けられ、その1室が御座所となる。すなわち奈良では最も格式の高い建築として位置した。

2 フェノロサの設計関与

2-1 宗兵蔵の述懐

日本人の大工棟梁たちだけで本当につくられたのだろうか。筆者は昭和戦前期に大阪で発行されていた建築土木系の新聞『日刊土木建築時報』¹⁴⁾に、「博物館東数町の所にある奈良倶楽部はフェノロサの設計」という文面を見いだした。昭和10（1935）年7月に大阪でおこなわれた「明治時代の建築を語る座談会」の内容がそのまま掲載されていた。そのことを語っていたのは奈良帝室博物館の実施設計ならびに現場監理を片山東熊の下でおこなっていた建築家・宗兵蔵である。四十数年前に知り得たことをこの座談会で吐露した宗兵蔵はこの時、72歳だった。その九年後には世を去っている。

宗兵蔵の略歴¹⁵⁾をみると、明治23（1890）年に東京帝国大学工科大学造家学科を卒業した後、明治24（1891）年に宮内省に入り帝国奈良博物館の設計に従事する。実施設計ならびに現場監理が担当だった。翌明治25（1892）年5月より奈良公園内の現場に赴き、明治27（1894）年12

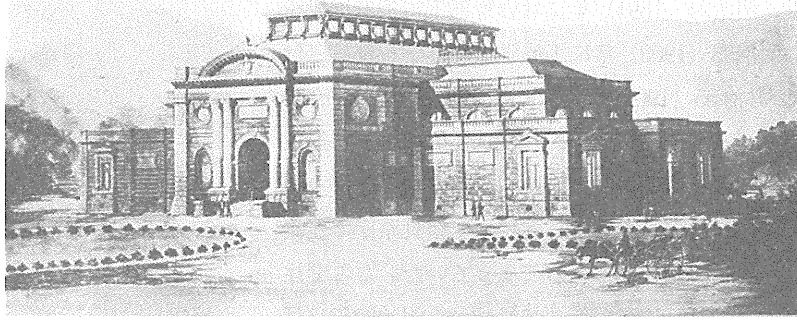


図1 帝国奈良博物館

月の竣工まで奈良に居住する。すなわち奈良滞在時にその数年前に完成していた奈良倶楽部についての話の類いは当然聞いていたのだろう。

「フェノロサ」とはアーネスト・フランシスコ・フェノロサのことだろう。フェノロサは明治11(1878)年に初来日し、東京大学文学部教官に就任する。フェノロサの奈良での足跡をみると、来日2年後の明治13(1880)年にはじめて奈良を訪れている。翌明治14(1881)年にも訪れ、以降毎年のように関西旅行を繰り返した。明治17(1884)年には法隆寺夢殿の開扉させていた。奈良倶楽部が着工する年である明治21(1888)年6月5日には奈良浄教寺¹⁶⁾で講演をおこなっている。奈良の古美術の価値を評価した人物であった。



写真6 宗兵蔵の顔

2-2 フェノロサの可能性

実際にフェノロサの設計の可能性はあるのだろうか。フェノロサは美術史家であって、建築家ではないのだから、建築家がおこなう内容の設計が出来るとはとても思えない。もし宗兵蔵の云うようにフェノロサが設計をおこなっているとしたら、おそらくその内容は基本スケッチレベルの提案だったとも考えられる。ただ判明するのはフェノロサが建築にも造詣が深く、奈良帝室博物館の構想はフェノロサの提案がきっかけになったものであった。

実際にフェノロサが関与しているとすれば、その提案を受けて図面化できる建築技術者の存在なしには実現は困難といえよう。既述した木村米次郎の述懐が正しければ、木村米次郎や高津米八が設計の図面をおこしたものと判断できる。後に詳述するが奈良倶楽部はトラス構造など洋風小屋組が用いられており、中央部の吹抜け空間をはじめ伝統的な和風建築とは異なる要素が多く、おそらくは洋風技術に習熟した大工棟梁がそこにはいたのだろう。

なお木村米次郎とは別に、奈良県庁に採用されたひとりの建築土木の技術者がいた。橋本卯兵衛という。奈良倶楽部が着工される年の明治21(1888)年2月23日に採用されている。その履歴¹⁷⁾をみると、安政2(1855)年大阪に生まれ、奈良県のなかで明治22(1889)年11月29日には橿原神宮創立建築事務委員となり、翌明治23(1890)年には奈良公園改良調査委員、同年

奈良県技手、明治24（1891）年には吉野郡下市千石橋仮設工事監督、明治33（1900）年に工業学校農林学校創設二付取調委員、明治35（1902）年には奈良県技師、明治43（1910）年には工師に昇格し、翌明治44（1911）年に退職という経歴を有した。いわば東京帝国大学出身の建築技師が数年で入れ替わるのに対して、継続して奈良県庁で建築土木の設計ならびに監督業務をおこなっていた。ここで注目されるのは明治21（1888）年2月23日から明治22年11月29日までの間の空白期である。確証はとれないが、この期間になんらかの形で奈良倶楽部建設に関わっていた可能性も否定できない。戦前期までは官公庁の建築技術者が委託を受けて民間建築の設計業務に携わるケースは頻繁にあった。



写真7 フェノロサの顔

2-3 フェノロサの建築理解

宗兵蔵による記憶が正しければ、なぜフェノロサが関与したことが広く世に広まらなかったのか。その理由はわからない。フェノロサは美術だけではなく、建築にも関心を有しており、3つのビルディングタイプに関する提案がフェノロサの著作から確認される。第一は美術館建築であり、明治22（1889）年5月16日の「帝国奈良博物館（陳列館）建築計画の諸条件」¹⁸⁾、第二は学校建築であり、明治22（1889）年1月以前の東京美術学校「計画案」¹⁹⁾、第三は住宅建築についてであり、明治30（1897）年4月12日から明治33（1900）年8月16日の「将来の住宅建築一少なくとも東京における」²⁰⁾がある。第二の学校建築では平面図にくわえて断面図のスケッチがあり、建築を空間として捉える能力があったものと考えられる。第三の住宅建築でもスケッチのなかで開口部の位置なども含めて正確に記されており、これらを総合して判断すれば、十分に基本設計をおこなうことができたと判断される。

以上、フェノロサ設計の可能性は探ったが、おそらくは外観スタイルや内部空間の提案レベルのものであり、スケッチくらいは描いた可能性もある。

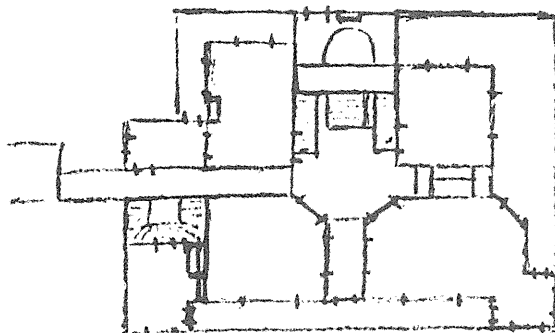


図2 フェノロサによる平面スケッチ

3 建築特質

この建築には従来の伝統的な和風建築では用いられなかった擬洋風や擬和風の手法が用いられており、明治以降の近代建築の特質を示す建築といえる。先の木村米次郎の述懐によれば、「構造之様式上代之楼閣ニ倣ヒ、其資材ハ梅一式用フ梅材一才ノ賃金五十銭、最高品ナレハ誠ニ高尚ナル建造物ナリ」とある。スタイルは奈良時代の楼閣をモデルとし、材料は梅普請、とある。

以下、古写真や模型、実測図面から、個々の建築特質を解説していく。

3-1 外観の特徴

全体の印象は塔を中央部に据え、左右、手前、奥に棟が伸びた形をみせる。外観の特徴は鴟尾をはじめ四方向の破風、海鼠壁、四方向の入母屋造りの3点が挙げられる。

鴟尾については管見の限りにおいては明治以降に建設された建物では最初のものだった。なぜこのような形になったのかは定かではないが、奈良では唐招提寺金堂や東大寺大仏殿には設けられており、奈良時代を象徴する屋根飾りと考えられていたからに他ならない。また玉虫厨子の屋根の棟の両端に鴟尾が備わっていた。玉虫厨子は明治9（1876）年の第二回奈良博覧会に出陳され、明治二十年代には国学者・美術史家・建築史家によって玉虫厨子への研究が開始される。木村米次郎は明治24（1891）年には古社寺修理技師として法隆寺の橋夫人厨子を修理していた。明治28（1895）年に完成する奈良県庁舎の屋根スタイルの鴟尾は、奈良倶楽部の鴟尾に触発された可能性がある。

敷瓦が壁に貼られた海鼠壁をみると、四方の破風の狐格子の部分が、ここではいずれもが海鼠壁となる。海鼠壁とは幕末の慶応4（1868）年に建設された日本初のホテル・築地ホテルの外壁に使用されており、ある意味では洋風の意匠と考えられていた側面もある。ここでの使用は擬洋風に通ずる趣向だったと考えられる。だが本来は伊豆下田や松崎、あるいは瀬戸内海の



写真8 奈良倶楽部外観・東北側

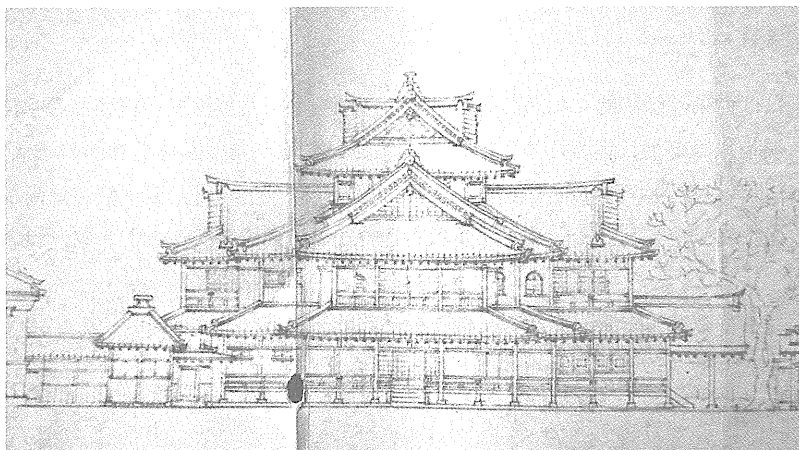


图3 侧面立面图



写真9 奈良県庁

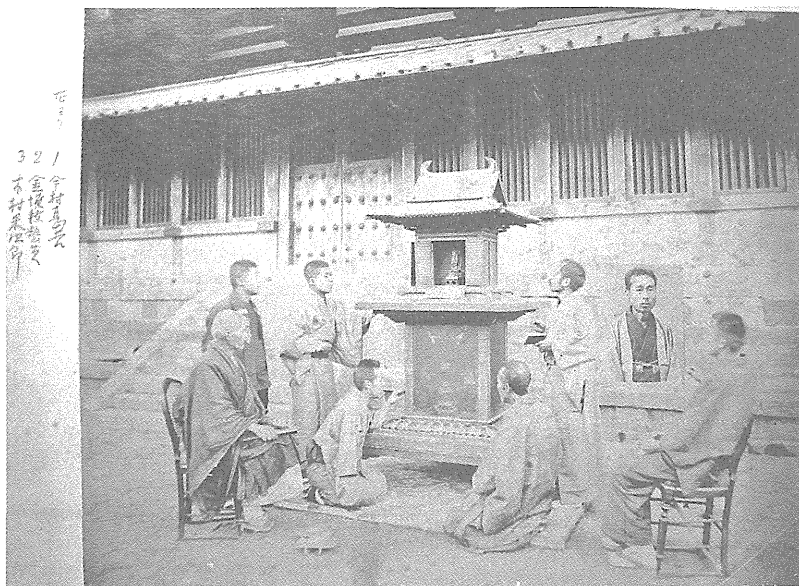


写真10 玉虫厨子と木村米次郎

倉敷、有明海の柳河など、全国各地の水辺沿いを中心に出現した耐火兼耐水を目的とし、外壁を守る手法であり、江戸後期には各地で成立していた。

入母屋造とは和風建築で最も格式が高い屋根の形であるが、四方向に展開されたケースはきわめて珍しいものとなる。また1階の屋根が2階の下屋のように広がった形態を採る。玄関部となる南方向だけは唐破風で檜皮葺の屋根が車寄部分に突出していた。

3-2 内部の特徴

内部は交差部が吹抜けとなる。その廻りを廊下が廻る。四方向の各室とは階段室を除くと、襖で仕切られており、この部分だけは板間となる。このような吹抜け空間は従来の和風建築にはあり得ないもので、他に類をみない。想起されるのは19世紀にアメリカで流行した八角形住

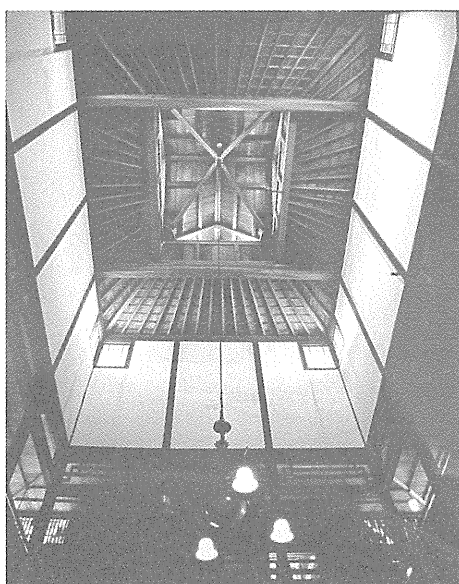


写真11 吹抜見上げ



写真12 吹抜見下ろし

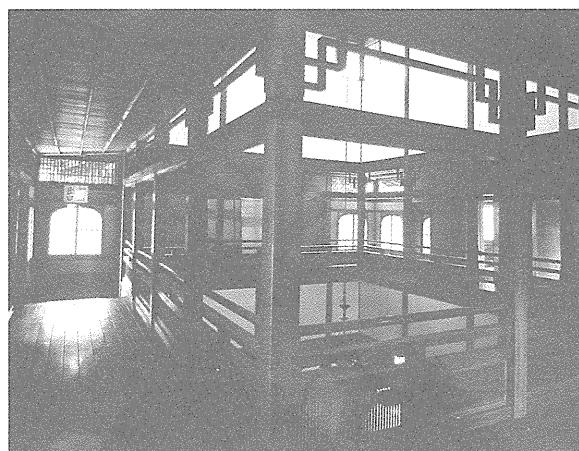


写真13 吹抜2階廻廊

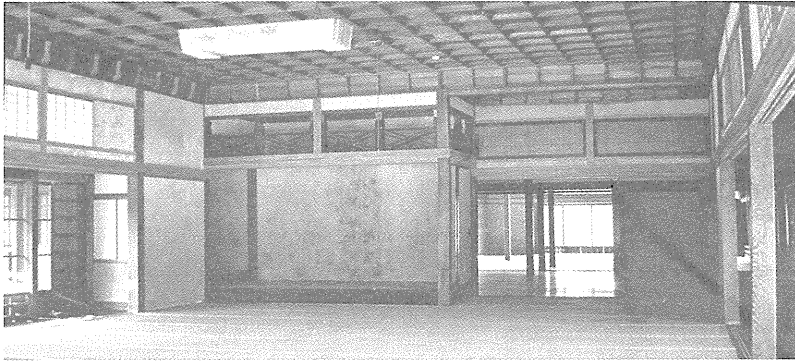


写真14 大広間

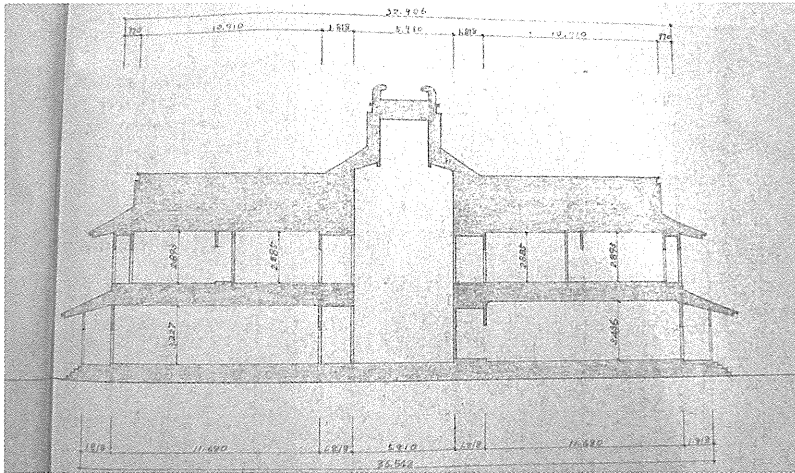


図4 断面図

宅²¹⁾である。その内部は吹抜けになっており、明治前期の日本でも小学校をはじめいくつかの建築類型で出現した。今はないが福井県三国湊の龍翔小学校²²⁾ではよく知られる。このような空間の採用からは外国人による提案があったことが推察されよう。

大広間の天井は折上格天井となり、床の間の小壁は欄間のような扱いとなり、竹の節欄間となる。内部の意匠は格式の高いものとなっていた。ただし天皇の行在所になった時にしつらえが変えられたことによるものかも知れない。廻廊の障子の意匠は香図組という組子となる。

3-3 平面の特徴

平面図は解体前に京都の建築研究協会で実測調査²³⁾が実施され、作成されたものである。平面図からは、入口玄関は南側にあり、京間が基本になっていることが読み取れる。2階建てで、中央部の塔が3階建てとなる。プランをみると、南北軸を短軸に、東西軸を長軸とした、いずれもが左右対称の形となることがわかる。つまり十字形の平面が生まれていた。和風建築としてはきわめて珍しいプランニングとなる。

南側の玄関、長軸と短軸が交差する箇所は寄木張りの広間となり、その左右にふたつの広間

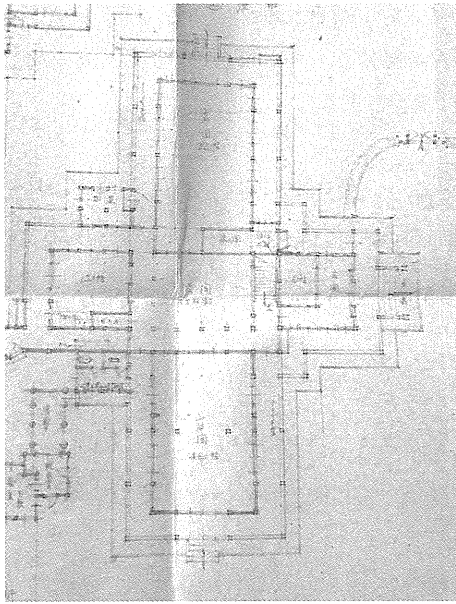


図5 1階平面図

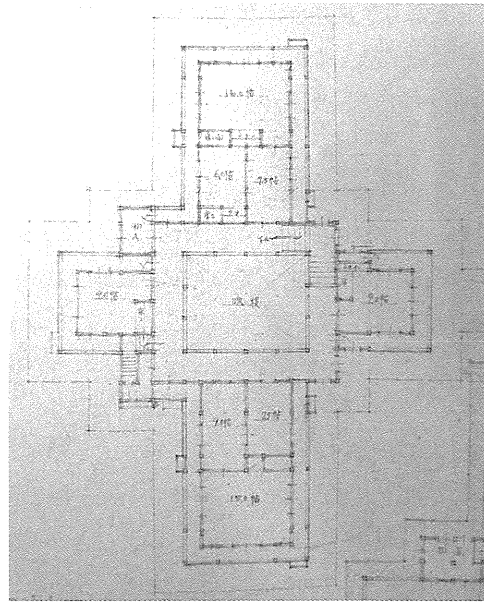


図6 2階平面図

が取り付く。東側が床の間付の52畳で、西側が床の間なしの48畳となる。このことは前述の天皇行在所になった時に改造された結果を示す。

2階は南側（玄関上）と北側は共に床の間が付いた9畳の和室からなり、東側は端部に床の間付16畳、内側には床の間付6帖と7.5帖からなる。西側は同様の室配置となる。

4 解体前の評価

この建物は28年前に詳細な検証なしに解体されてしまったが、取り壊す前に奈良県は浅野清や大江宏ら建築の専門家に建物鑑定²⁴⁾を依頼している。愛知工業大学教授だった浅野清は「2号館は純和風と見倣してよい」とし、奈良女子大学教授だった扇田信は「公会堂はおもしろい意匠で、一号館は立て直し、二号館は残す方向で検討して欲しい」と記した。奈良倶楽部は二号館である。

一方で芸術院会員だった建築家で法政大学教授をつとめた大江宏は奈良倶楽部の建築に対して「奈良公会堂改築に関して」²⁵⁾というメモを残していた。奈良倶楽部に関する記述を以下に記す。

2号館の方は、和風建築の手法を用いながら、その構成は所謂伝統的なそれとはその趣を異にし、きわめて独創性に富んだ建築である。十字形の平面構成、並びにその中心交叉部を外見三層、実質2階建の吹抜けとした立体構成などは、旧来の日本建築にはあまり例を見ないものであり、さらには建物の外周面をすべて開放にしている点など、その後に登場してくる近代建築の構想に近いものさえ感じさせるものがある。この2号館の特徴は、そのような独創的な空間構成が、伝統的な日本建築の手法によって生まれているという点

にあり、明治20年代初期当時としては、きわめて大胆、斬新な創作である。その文化財的には合致しないとしても、さらに広義な建築本来の観点からすれば、2号館にはその創造性の上で、高く評価されるものがある。(傍点は筆者による)

ここからは、「独創性」や「大胆、斬新な創作」とあり、大江宏が高く評価していたことが判る。大江宏の父・大江新太郎は木村米次郎が現場責任者をつとめた明治神宮造営技師であり、そのような意味で父の同僚が設計で関わった奈良倶楽部の建築を理解できた数少ない建築家であった。

結

1. 奈良倶楽部とは銀行の集会所としてつくられるが、天皇の行在所となるなど、奈良では最も格式の高い建築として位置した。奈良の大工棟梁で後に明治神宮の建設責任者となる木村米次郎が設計に関わっていたことが判明した。
2. 奈良倶楽部の設計がフェノロサによるものとの建築家・宗兵蔵の述懐を受けて、設計の可能性を探ったが、おそらくは外観スタイルや内部空間の提案レベルのものであり、スケッチくらいは描いた可能性もある。
3. 建築的特質については、外観では屋根上に鴟尾・海鼠壁の破風・四方向ともに入母屋造り、内部空間では吹抜け空間、平面形では十字形などに特徴がみられる。従来の伝統的な和風建築では用いられなかった擬洋風や擬和風の手法が用いられており、明治以降の近代建築の特質を示す建築といえる。
4. 建築専門家の間での奈良倶楽部の評価は低かったが、建築家・大江宏は空間性ということで高い評価を与えていた。

表2 写真・図版一覧

	番号	名称	出典
写真	1	奈良倶楽部外観・西南側	建築研究協会撮影
	2	空撮	建築研究協会撮影
	3	木村米次郎の顔写真	木村家所蔵
	4	伊勢の神宮農業館	木村家所蔵
	5	木村米次郎邸	川島智生撮影 2013.3.16
	6	宗兵蔵の顔	坂本勝比古『日本の建築明治大正昭和5商都のデザイン』三省堂. 1980
	7	フェノロサの顔	『フェノロサ資料1』ミュージアム出版. 1982
	8	奈良倶楽部外観・東北側	建築研究協会撮影
	9	奈良県庁	『明治大正建築写真聚覧』建築学会. 1936
	10	玉虫厨子と木村米次郎	木村家所蔵
	11	吹抜見上げ	建築研究協会撮影
	12	吹抜見下ろし	建築研究協会撮影
	13	吹抜2階廻廊	建築研究協会撮影
	14	大広間	建築研究協会撮影
図	1	帝国奈良博物館	『近代建築画譜』近代建築画譜刊行会. 1936
	2	フェノロサによる平面スケッチ	村形明子『アーネスト・F・フェノロサ文書集成』京都大学学術出版会. 2001
	3	側面立面図	建築研究協会作成
	4	断面図	建築研究協会作成
	5	1階平面図	建築研究協会作成
	6	2階平面図	建築研究協会作成

謝辞：木村米次郎の御遺族ならびに奈良県新公会堂、奈良県立図書情報館の皆様には、取材調査の際に協力を得た。ここに感謝の意を表します。

注

- 1) 旧郡山藩主柳沢保申が明治12年（1879）に提唱した国立銀行で、現在の南都銀行の前身のひとつ
- 2) 大阪の繊維関係の有力商人たちにより明治11年（1878）に開業した国立銀行で、初代頭取は岡橋治助がつとめる。のちに三和銀行となり、現在の三菱東京 UFJ 銀行の前身のひとつ
- 3) 『奈良公園史』奈良県. 1982
- 4) 『青山四方にめぐれる国一奈良県誕生物語一』奈良県. 1987
- 5) 森本和男『文化財の社会史』彩流社. 2010、由水常雄「廃仏毀釈の行方」『芸術新潮』279号. 新潮社. 1973、梅原末治『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告第3輯』大阪府. 1930
- 6) 奈良の郷土史家・藤田祥光（藤田庄二郎）により昭和8（1933）年に作成された手稿であり、奈良県立図書情報館に藤田文庫として所蔵
- 7) 正しくは「米次郎」であるが、ここでの記載は「米治郎」となっていた。
- 8) 木村良雄「木村米次郎の略歴」『規矩術』私家版. 1935
- 9) 明治10（1877）年に生まれた奈良市の歌人かつ郷土史家で、昭和2（1927）年より昭和25（1950）年に亡くなるまでの20年間、明治維新以降の奈良の郷土資料蒐集ならびに史料調査、聞き取りなどをおこない、文書をまとめた。
- 10) 伊東忠太「明治神宮の建築について」『学会月報』397号（大正10年3月号）. 1921、によると「現場を司り或は材料の処理に任じ、或は設計製図に従事し」とある。
- 11) 清水重敦「トラスを入れる一明治を生きた大工木村米次郎と近代和風建築一」『月刊文化財』456号. 2001
- 12) 現存する。国の登録文化財となる。
- 13) 中西金属工業株式会社の本社屋として当時の工場の一部が現存する。番地は大阪市北区天満橋3丁目3-5
- 14) 「日刊土木建築時報」夏期特集号. 昭和10年7月25日 第1115号特別号、による。
- 15) 坂本勝比古『日本の建築明治大正昭和5商都のデザイン』三省堂. 1980
- 16) 奈良市上三条町18に所在する浄土真宗本願寺派の寺院
- 17) 「橋本卯兵衛氏略歴」『今井の建物Ⅱ』林清三郎・今井町街並み保存会. 2005
- 18) 村形明子編・訳『アーネスト・F・フェノロサ資料第一巻』ミュージアム出版. 1982
- 19) 前掲18と同じ
- 20) 村形明子『アーネスト・F・フェノロサ文書集成一翻刻・翻訳と研究(下)』京都大学学術出版会. 2001
- 21) レスター『図説アメリカの住宅』三省堂. 1988
- 22) 川島智生「擬洋風建築の極北・三国湊の龍翔小学校について」『文教施設』37号. 文教施設協会. 2010
- 23) 昭和55年度の調査設計業務委託。奈良県新公会堂所蔵。
- 24) 昭和57年度の改築検討懇談会。奈良県新公会堂所蔵。
- 25) 大江宏「奈良県公会堂改築に関して」大江宏建築事務所。年月日は記されず、手書きされたものである。奈良県新公会堂所蔵。

（原稿受理日 2013年9月30日）